

ヘドリン九七b)。イエスやムハンマドはゼカリヤ書にあるメシアだと彼らは主張するが(ゼカリヤ九・九)二人はイザヤ書のロバとラクダに乗る者であり(イザヤ二一・七、九)メシアではない。第三に、メシアが来る話は経験上いつも嘘である。

この手紙は『迷える者の手引き』とは異なり、あからさまにイスラームとキリスト教を批判しているが、当局の手にわたる危険を顧みず、苦しむ同胞のために書き送ったことがうかがえる。また、聖書(特に申命記、イザヤ書、詩編)から多数の約束の言葉を引用し、同胞を励ましている。この手紙がきっかけとなってメシア運動は衰退し、マイモニデスがサラディンにかけあつたことで迫害も止むことになる。共同体のリーダーとして、言葉だけでなく、迫害を止めるため具体的行動を取ったことが注目される。聖句に固く立つようにと語っているが、彼自身も神の言葉に信頼しつつ行動したのであろう。

一九世紀東欧ユダヤ教の危機とハラハー的伝統の革新

市川 裕

ユダヤ教の苦難は、自然災害ではなく異邦人側から受けた迫害などの人災が主題となる。人災は、戦争や暴動あるいは強制改宗などユダヤ社会の破壊を目的とした場合には、生命の危機に直結する。これに対して、本論の事例は、危機であるが、時代の変化に伴う共同体の変容が扱われる。一八世紀末の西欧から始まったユダヤ人解放は東欧にも波及する。そのときユダヤ社会は西欧と東欧で大きな違いがうまれた。それはなぜだったか。

ユダヤ人解放は、近代国家の成立に伴って同等の市民として社会に受容される事態である。これは客観的情勢として西欧に起こり、ユダヤ人の身分は明らかに上昇した。ユダヤ啓蒙主義者などの開明知識人は、これを推進する方向に制度改革を断行し、ユダヤ教自体をキリスト教を模した制度に変更していく。いわゆる改革派乃至進歩派の出現である。西欧ではここからさらに同化、世俗化、キリスト教への改宗が起こった。

これは、ラビ・ユダヤ教始まって以来の最大の「存亡の危機」、内側からのユダヤ教の崩壊の危機といえよう。伝統主義者にとつて、神の啓示法である神聖なハラハーの伝統は、人との関係を律する政治的規定と神と人との関係を律する宗教的規定の両方を包括する法体系である。これがユダヤ人に聖なる身分を与え、苦難に向き合う宗教体制の根幹にあった。市民権を取得することはこのハラハー体制の廃棄を意味したからである。

しかし、西欧では、この同化主義こそが正当性を得てユダヤ人は繁栄を謳歌し、学者、思想家、芸術家、銀行家、資本家を輩出した。西欧のユダヤ人は時代の先端であり、東欧の同胞は時代遅れでカバラーの迷信がはびこる迷妄の世界とみなされていた。ところが、一九世紀末以降、完全に西欧文化に同化した家庭の子弟から、東欧ユダヤ教の伝統主義・ハシディズム・シオニズムの中に、失われたユダヤ精神の源泉を認める人々が出現し、郷愁とともにユダヤ文化を再発見する動きが生じた。

この結果から判断すれば、近代化に遭遇した東西ヨーロッパにおけるユダヤ社会の対応の違いは、ユダヤ教的伝統の存続と

いう点に関する限り、東欧がはるかに真剣だった。その原因は何か。客観情勢では、西欧と同様に東欧においても近代化とともにホスト社会の同化への圧力が加わり、内部からもユダヤ啓蒙主義の運動が起こった。知識人と大衆を分断すれば指導者を失った大衆は周囲に同化するだろうと考えられた。

しかし、西欧との異なる条件がいくつか指摘できる。第一に、人口が多く、定住地域での団結により、ユダヤ文化への屈辱や同化への圧力が西欧に比べ少なかった。第二には、そうしたユダヤ社会に宗教的情熱を吹き込む新たな複数の運動が、互いに敵対的ではあったが発展を遂げたこと。東欧の南部ウクライナではハシディズムが一七五〇年以降に盛んになり、全域に広がる。他方、北方のリトアニアで正統主義が一七七〇年以降に活性化し、当初はハシディズム勢力に異端宣告を行うが、次第にそれらを取り込んで、世俗化に対抗する強力な基盤が形成される。このときに新たな学塾イエシヴァが果たした役割が注目される。伝統的価値であるタルムードを新たな視点から学習し直す教育制度を導入したことの意義である。ユダヤ啓蒙主義とハシディズムとタルムード教育の三者の中で、若者が一番魅力を感じたのがタルムード教育だった。ユダヤ啓蒙主義とハシディズムとは、欧州全体でも起こっていた普遍的な運動と相通ずる運動である。人間理性の重視により迷信を排除する理性主義および、罪意識と内面性の強調である敬虔主義である。この同時代的で普遍的な二つの運動を包括するようなユダヤ教独自の古典学的教養が全ての生存の基礎に位置づけられたことが、現代におけるユダヤ教の再活性化を支える根本原因である。

パネルの主旨とまとめ

勝又 悦子

ユダヤ教の歴史は、危機と試練の連続であった。本パネルでは、様々な時代と地域のユダヤ教、ユダヤ教徒、ユダヤ人が、宗教的支柱を失い、生存の危機に直面したとき、共同体崩壊、伝統崩壊の危機に直面したとき、それをいかに解釈し、向き合ってきたかについて、事例を挙げながら考察した。ユダヤ教の「危機」を通して、現代社会が直面する困難、危機に対して示唆が得られないかという意図があった。

大澤発表では、出エジプト記三二章の金の子牛像の事件をアラム語訳聖書(タルグム)を中心に分析し、ラビ・ユダヤ教にも見られる解釈を聖書本文の中に織り込んだことに特徴があると指摘した。勝又発表では、紀元七〇年のエルサレム第二神殿崩壊の理解を、その後のユダヤ教のベースとなる『ミシュナ』を中心に分析した。予想外に『ミシュナ』中に「神殿崩壊」の記述は少なく、「神殿健在時」の記憶が主流である。しかし、少ない中にも「神殿崩壊」とラビ・ユダヤ教の立役者を重ねて記述しているという特徴がある。神田発表では、一二世紀混乱に陥ったイエメンユダヤ教共同体にマイモニデスを送った『イエメンへの手紙』を題材に、ラビとして彼が聖典に基づいてユダヤ伝統をどう解釈したかを考察した。聖句を多数引用したこの手紙と、サラディンに直接訴えたマイモニデスの行為は、まさに彼が訴える「聖句に立つ」行動であった。市川発表では、一九世紀東欧の近代化とロシア帝国の征服、またユダヤ社会内部から生じたハシディズムの分派と啓蒙主義ハスカラーの浸透